

英語で教える専門教育—国際関係論の1事例—

清水 亮

松阪大学政策学部

I. はじめに

文部科学省の「特色のある大学教育支援プログラム (COL)」に採択された80校を見ると、英語教育と専門教育の橋渡しを試みた大学の申請が多く採択されたことが特徴の1つとしてあげられる。しかし、実際には、それらの大学のほとんどは、以前から外国語教育に力を入れている大学であり、いかに英語教育と専門教育の橋渡しが難しい課題であるかを再認識させられる。文部科学省が課した1校1件というCOLの申請条件の中で、京都大学が、外国語教育の再構造化で申請をし、採択されたことは、京都大学でもこの課題に対して早急な解決を目指し、正面から向き合わざるをえない状況に直面していることを示唆している。

英語と専門教育の橋渡しを目指すものは、日本人教員、ネイティブの教員に関わらず、大学における英語での専門教育の実践であるはずである。しかし、ここ数年、文部科学省メディア教育開発センターで、「英語メディア教材を活用し英語で教える人文系専門教育」研修の講師を担当して感じることは、文部科学省の『英語が使える日本人』育成のための戦略構想と現場のギャップの大きさである。研修の参加者は、ほとんどが英語科目の教員で、専門科目の教員は皆無に等しく、諸大学の「英語での専門教育」についての認識は、海外提携校からのネイティブの客員教授による授業の域をほとんど出していないのが現状である。このギャップの解消と現場の意識改革には、日本人の専門科目の教員のイニシアティブ、そして、FDに熱心な教員の意欲を最大限活用できるような、所属大学の枠を越えた様々な学生のレベルに応じたFDのネットワーク確立と教材開発が不可欠である。この研究発表では、国際関係論の一般教育科目、アメリカのイラク侵攻と世界、として利用できるアメリカのWGBH制作のThe Long Road to Warのビデオ(約2時間のビデオで、NHKでもBSプライムタイムで放映された番組)を1 Semester用の教材として活用する事例を、シラバスとともに提供し、研究部会の同僚及び参加者からの忌憚のない批評を期待したい。

II. The Long Road to War の背景と教えるもの

The Long Road to War は、アメリカの Public Broadcasting Service が、エミー賞など様々な受賞作品を生んだドキュメンタリー作品のシリーズ、FRONTLINE で、2003年3月17日に放送した番組である。この番組は、現職のブッシュ大統領を含む3代の大統領の過去12年に及ぶイラクとサダム・フセイン大統領との関係を、FRONTLINE で放映した10本の関連番組を基に集大成する形で制作された番組である。番組は、2003年3月、イラク侵攻の決断が、大統領の手に委ねられたところで終わっている。この番組は、アメリカの外交政策を担う人々の確執と、その外交政策へのインパクトに焦点を当てながら複雑な政策決定過程を明らかにしようと試みている。現実の政策決定を担う人々のインタビューや文書を見ながら、視聴者は、「事実は小説よりも奇なり」の言葉を実感する。

911のテロに始まり、アメリカは、国連を無視して、イラクに侵攻したが、2003年5月1日のブッシュ大統領のイラク戦争大規模戦闘終結宣言以降、半年経っても、米軍含む

連合軍の死傷者は増加するばかりで、政権支持率も低迷し、未だイラクの治安は回復されたとはいえない状況が続いていた。そんな中での、12月14日のフセイン元大統領拘束は、アメリカ単独行動主義に対するヨーロッパや野党民主党からの激しい批判を、一掃する可能性があるものの、事態が収束に向かうのかまだ予断を許さない状況が続いている。現状では、国連を無視して米英主導で行われたイラク侵攻が正しかったのかという問いへの答えは出ていない。イラク侵攻の大義とされた大量破壊兵器は未だ発見されていない。フセイン元大統領の拘束により、これらすべての問題がアメリカの思惑通りに解決するとも考えにくい。さらに、今回のフセイン元大統領拘束は、元大統領をどう裁くかという問題だけでなく、過去12年に3代にわたるアメリカの大統領のイラク外交の問題点、および、ロシア、フランスからイラクへの武器輸出の問題点をも、白日の下にさらすことにもなる可能性がある。これらの意味で、**The Long Road to War** を利用しての授業は、国際関係を専攻する学生にとってとりわけ示唆に富むものとなるはずである。一方、アメリカのイラク侵攻は、国際関係にあまり興味のない学生にとっても、2003年11月29日の2人の日本人外交官襲撃殺害事件、12月9日の小泉首相による自衛隊派遣基本計画の閣議決定及び発表など、国際社会が国内社会に与えたインパクトの大きさから、興味を持たざるをえないテーマの1つとなるはずである。

III. **The Long Road to War** を活用して、英語で教える「国際関係論」

11週間ワンセメスター完結の英語での授業を想定し、第1週目のオリエンテーションから、最終回のサマリーとディブリーフィングまで、ビデオの内容に従って授業を構築する。ビデオは、約120分あり、平均的には、1回10分程度の上映、内容のブリーフィング、クエスチョン&アンサー、ディスカッションと、サマリーの5部構成とする。英語力、とりわけヒヤリングが不得手な学生のために、毎回事前に、ビデオのトランスクリプトを配布して、授業時には、最低限の内容が把握されていることを前提とする。授業では、アメリカとイラクの関係、フセイン元大統領の所業、ブッシュ現大統領が、父の湾岸戦争におけるミカンの目標を完結するという決断をするに至るまでの、大統領を取り巻くキープレーヤの考え方と駆け引きを明らかにすると同時に、フセイン政権の軍事大国化は、アメリカにより、冷戦下、対ソ戦略から、イラン・イラク戦争で、イスラム原理主義に対抗するため推進されたという大きな流れを把握させ、今後の国際関係に思いをめぐらせることを目標とする。

第1回 オリエンテーション

第2回 **The Arming of Iraq** アメリカ・イラク蜜月時代

第3回 **The Survival of Saddam**

第4回 **To the Brink of War** 湾岸戦争にいたる経過

第5回 **The Mind of Hussein**

第6回 **The Gulf War Part A** 湾岸戦争

第7回 **Spying on Saddam UNSCOM** とイラク

第8回 **The War Behind Closed Doors : Unfinished Business**

第9回 **The Long Road to War** から **The War Behind Closed Doors: Bush Doctrine**

第10回 ABC News 制作 **This Week with George Stephanopoulos**

2003年12月14日放送分（フセイン元大統領拘束に関する特別編成番組）の上映

第11回 コース・サマリーとディブリーフィング